

重度心身障害児への人間学的接近（第7報）

——障害児群像——

後藤秀樹¹⁾

目的とか目標とかに捉われてはいけないということだ。

いま歩いている私の実在は、歩いているこの一步、一步なのだ。

この一步、一步が私のすべてなのだ。

小沢道雄，“足なし禅師，本日ただいま誕生”より，

はじめに

今年私が入ることになった“こばと学園”的北棟で、一昨年は、23才のヒトシ*と取り組んだ。私にとっては、1年をおいて、2度目の北棟体験である。

一昨年は、おっかなびっくりヒトシと取り組んでいた私であったが、ヒトシの瞳は、いつも哀しげに澄んでおり、常に真摯に問いかけているようであった。“オトオニアイタイヨウ”と、父ひとり子ひとりの家庭にあったヒトシは、父と一緒に居たいと訴える。オトオに会いたい。オトオはいつ自動車で来るか。今度はオトオのところへ帰れるか。さまざまな思いを込めてヒトシは、“オトオに会いたい”とそれだけを繰り返す。私には、ヒトシの切実な訴えが胸にしみ、返す言葉も見つけられなかった。そのヒトシは今、オトオに引きとられ、父子水入らずの人生を送っているという。ヒトシとそのオトオは今、精一杯に生きている。

今年のこの北棟には、7才のカズミちゃんから、51才のホッタさんに至るまで、比較的広い年令層にわたる31名が生活している。ひとりひとりが、それぞれに強烈な個性をもちながら、1日をこのディルームで介護を受けながら過ごしている。その瞳は澄んでいるが、キラキラと輝く機会は数少ないようと思われる。それは、この子たちの受けている障害の故なのだろうか。この子たちはこの子たちなりに、生きていることを実感しているのだ

ろうか。

こここの子どもたちはまた、ひとつの空間を共有しているにもかかわらず、その相互交渉は、ほとんど見られない。ここでは、ひとりひとりが、みなバラバラであるようだ。この子たちは、まわりの“ひと”に対し、どのような意識をもっているのだろうか。こうした問題は、ここでの考察の軸となるべきポイントとなるだろう。

I 北棟での5日間

1. “取り組み”的めのとらえ

西村（1973）は、重度の心身障害児の分類、診断の問題を論じて、“取り扱い”的めの診断から、“取り組み”的めの診断へと、発想の転換を説いている。そうした考え方には、共鳴するところが多いが、実習といふいわば特殊な状況の中でのジレンマが多い。この5日間の中で、子どもたちの示してきた行動が、真に子どもたちの生きている“なま”的姿であるといえるだろうか。また、日々の“取り組み”に参加していない私の理解は表層的であり、無責任な理解に終わりはしないか。そうなる可能性は、充分に認識されねばならない。

私は、子どものひとりひとりが、その時々に示す姿を誤解しないようにせねばならない。そのためには、ひとりひとりになじみ、じっくりとつきあいを深める一方で、その子どもたちの生きてきた背景を理解することも考えるべきであろう。私は、折にふれ、カルテに目を通し、職員の方に、ふだんの様子をきくことにした。

そうして接する中で、ひとりの子どもの生きる姿の一端にふれ得た時には、床に寝転がっているだけのその子

1) 名古屋大学大学院教育学研究科博士課程（後期課程）

* 以下本文中に用いる名前はすべて仮名である。

の姿が、急になまの存在感を持つようになる。それでもなお、私の理解は、表層的で、無責任であるかも知れない。それは、私自身の貧しさでもあるだろうし、さらには私の置かれた立場における限界でもあるだろう。そうした限界をふまえることは、ここでは重要である。“取り組み”的のとらえをめざすという方向性は、堅持したい。こうしたとらえを深めることにより、取り組みを深めていきたい。この短い時間の中で、まさにこの私との出会いの中で、かかわりの中で、示してきたひとりひとりの動きについて、私なりにとらえたものを、ここに提示したいと考える。

2. 5日間の流れ

一昨年、私は3人の仲間と共に、この北棟に入り、ヒトシに取り組もうとしたが、3日目の朝、父親の元に帰省してしまった。従って、以後の私は、自由な立場から他の多くの子どもたちとかかわることができた。一年おいての今回は、4人の仲間とまた北棟に入った。最初から、この集団の全体像を捉えようとの気持ちも強く、特に担当の子どもを決めては入らなかった。

最初の日は、子どもたちの昼食時から病棟に入った。この半日間は、病棟の雰囲気に慣れるために費される。ひとりひとりの顔を確認し、名前を覚えてまわる。

2日目は朝食介助から始まる。職員の朝の申し送りの時、子どもたちが、興奮状態にあることを指摘され、看護の係長より、その点について、私どもに問題提起がなされる。その日は、子どもたちの、はしゃいだり、不安になったりしている状態を見きわめようと、慎重に動く。何人かの子どもの状態については、係長から説明を受けることができた。

3日目に入れば、子どもたちの状態が、私なりにつかめてきている、そこまで積み重ねてきたいいくつかの体験にもとづいて、ひとりひとりの子どもについての全体像を、構成してみた。そしてまだ、よくとらえられていない子どもについて、特にその介護に参加するようにしていった。

4日目は、子どもたちの集団保育が、私ども実習生に任せられることになった。それは、初めての経験でもありそのための準備に、午前中の大半を使ってしまった。モタモタしながらも、全員を庭へ連れ出して、歌、リズム遊び、踊り、折紙、人形劇など工夫して、どうにか1時間の集団保育を行なった。そこで子どもたちの反応の中には、またいくつかの目を見張るような新しい発見があった。

最後の日は、昼食介助までであった。養護学校の先生がみえて、午前中は、主として扇風機と風車を教材に使

っての授業がすすめられた。最後には、子どもたちとのお別れ会がもたれた。子どもたちの熱心なリクエストにあい、実習生そろって、“アブラ虫”の踊りを踊って、子どもたちと別れを告げた。

こうして5日間は、またもあっという間にすぎてしまったが、子どもたちとのかかわりの一瞬一瞬は、今年の私には、ことのほか貴重なものと実感された。同時に、自分の無力であることなども、ひどく考えさせられてきた。どうすることが、この子たちの発達援助のよりよい道につながっていくのか。この問題は、あまりに複雑すぎて、今の私には判らない。ただ、私なりの視点から、子どもたちが、今、ここで、現実にこのように生きているという姿の一端を記していくことは、そのような方向性をすすめていく一つのステップであると考える。

II 31人、その素描

1. 生きてる哀しみ

〈トミちゃん〉：トミちゃんは、北棟の中では一番話の通じる相手だ。一昨年も私どもの実習の対象児でありその時の記録は、〈第6報〉に詳しい。今年もまた、対象児に選ばれ、その担当者と、いつも親密に話をしていた。自分の悩みを言葉にできる子だ。トミちゃんは、常に周囲に気を遣い、他の子たちの様子に気をつけ 職員に気兼ねしている。親しくなるまでは、“デス・マス調”的の話しぶりを崩さない。以前と較べ、だんだんと体が曲がってきていたのではないかとのトミちゃんの悩みは、一面で心気症的であるかも知れないが、切実で重い。明るく振舞ってはいるが、全身麻痺のトミちゃんの胸のうちには、生きていることについての気兼ねのようなものがある。お父さんが抱く時に重いから、私はこれ以上大きくなりたくないというトミちゃんの言葉は、すごく哀しいことばだ。

〈キョウコ〉：明るくて、くったくがなく、野口五郎の大好きなキョウコは、抵抗なく誰にでも話しかけ、すぐに親しくなってくる。トミちゃんの担当者が自分の相手をしてくれないと、泣いてすねてみせる可愛い10代の女の子だ。この子の明るさは、まわりにとっても、大事な宝のように思われる。

〈ヨシコさん〉：私は、ヨシコの知的能力についてはかなりの間、正当な評価をしていなかった。一日じゅう、自分の車椅子に座ったきり、頭をゆらりゆらりとゆすりつつ、頭につけた1本の棒を使ってひらがなタイプを打っている。それを何気なく見過ごしていた私は、ヨシコさんが、巡回のドクターと話をしているのを聴いて、目を見開かされる思いであった。ヨシコさんは、満身の力をふりしぶって、ドクターに話かける。一言一言に力が

こもり、長い時間がかかるって、やっと一つの言葉が伝わった。“ナカナカ、間違えないで、うてるようにならない。”早く自分の気持ちが伝えられるようになりたいと。多くの部分は、ドクターが、その言葉を補った。ヨシコさんは、おそらく、自分を表現できないが故に、理解されないが故に、大きな苦しみ、悲しみを、背負ってきたのだろう。ヨシコさんは、1日中、汗にまみれて根気よく、ひらがなタイプを打ち続ける。この姿は、無条件に私を感動させる。私は、おごそかな気持ちで、タイプを打ち終ったヨシコさんに言葉をかける。“疲れたね”と。ヨシコさんの満面に嬉しそうな笑みが拡がった。

〈ホッタさん〉：北棟最年長のホッタさんは、職員に対し反抗的で、不満が多い。私ども実習生をつかまえでさまざまなグチを早口にまくしたてている。常に小学校の国語の教科書などを、布のカバンに入れて持ち歩き、私どもに読ませたり、文字を筆写させたりする。そして自分はこのぐらいのこと知つとるでエエワ、オマサン書きゃあエエノと何度も何度も繰り返す。ホッタさんは、自分の存在価値の認められないこと、年令相応の尊敬のうけられないことを、憤っているように思われる。無視されたり、子ども扱いされたりすることが、たまらなく怒れてくれることのようだ。私どもにマッサージをしてくれたり、お尻にさわってふざけている時のこのオバアチャンの瞳は、生き生きとして楽しそうだ。

●北棟の中でも、もっとも話の通ずるこの4人は、みなそれぞれに、その生き方を私に語ってきかせてくれている。自らの身体を動かそうとして動かし得ないそのいら立ちと、その苦しさを、みなそれぞれに語ってくれる。みな自分自身の今の一刻を生きていくのに精一杯だ。まわりのみんなの様子を見ててくれるトミちゃんも、自分の大きな悲しみと闘うことに精一杯だ。深いうなづきを持って、その言葉を受け止めてくれる相手に出会うことが、この子たちの人生においては必要ではないだろうか。

2. 甘えと反抗

〈ミヨちゃん〉：私どもの実習がはじまって以来、甘えがひどくなっていることが、職員の申し送りの時に報告された。30才を過ぎたミヨちゃんの内的世界は、ごく単純構造だ。人形とヒモを、両手で差し出して“オンバー”と、人形をおぶわせるよう要求してくる。“ンンン”と鼻声で、ダダをこねてみせる。“オブーちゅう”“ホンとて”“ベタベタ、ババイ”などと、次から次へと要求してくる。“この子は破衣行為があるんです”と係長が説明してくれる。職員の気をひいて相手になつてもらおうとするミヨちゃんの気持ちは、その位強いも

のなのだろう。お手伝いをよくし、その反面で要求が多く甘えん坊のミヨちゃんの姿は、生活記録の中でも一貫して変化しない。ミヨちゃんが、“赤ちゃん”を背負って甘えてくる姿は、どこか象徴的なものがある。ミヨちゃんは、赤ちゃんになりたいのではないかと思う。知恵遅れのミヨちゃんの精神発達は、せいぜい5才児水準までに見受けられる。この年令の幼児が、依存対象を求め甘えたがるのは、ごく自然の姿だ、ただミヨちゃんの甘えには、30年という年期が入っている。受け止める側は素直には受け止められない。ミヨちゃんの甘えは、誰彼かまわず向かれて、拡散し、エスカレートする。ミヨちゃんは、こうした状況の中で、その発達課題が乗り越えられず、自立できない。もしでき得るものならば、特定の人との依存関係が、充分にミヨちゃんに体験されると良い。ミヨちゃんは、その関係の中で、自立することができていくだろう。それはミヨちゃんの一歩の発達であるだろう。この一歩の発達が、この北棟の生活の中でどれ程の意味を持つのかまだよくわからないでいる。しかし、一回限りのかけがえのない人生は、常に前向きでありたいと思う。

〈ヒトミ〉：一昨年、甘えん坊で、活発に動きまわっていたヒトミは、今年すごくおとなしくなってしまっている。言葉も減った。私は、ヒトミのこの変化が、初日から気にかかっていた。“ヒトちゃん”と言って、自分を指差してみせたヒトミは、今、無言のままに私を手招きしている。私のホッペにキスしてくれた一昨年のあの情熱的なヒトミは、トロンとした目つきで、シャンプーのビンをもち歩いて遊んでいる。それでも、一緒に外へ出て遊んだ時のヒトミは、すぐ生き生きとしていて、一昨年の様子を思い起こさせるものだ。他の子どもたちでも、外に出た時には、みな一様に目を輝かせている。トンボを見つけ、チョウチョを指差し、“アーッ”と歓声をあげる。けれど体の不自由なこの子たちに、そうした体験を充分させてやるのは、きわめてむつかしい。しかし、ヒトミを通して私の感じたものは無視することのできない現実だ。この限られた生活空間の中での生活に、ヒトミは適応していったのだろうか。ここがまさしく、ヒトミの生きる場であるのだから。

〈ハルオ〉：小さいハルオは、乳児院育ちだ。用があると“オーア”と近くの人を呼ぶ。色んなものに興味を示し、多くの人から可愛がられる。他児が自分の領分を犯した時には、髪の毛をひっぱったりして、怒った顔でケンカをしかける。ハルオを相手に争そおうとするような子どもは、けれど、ひとりも居ない。“オーア”と職員を呼んで相手になってもらっているハルオは、2年間にずいぶんとしっかりしてきたものだ。

〈大マーチャン〉：今年の対象児のひとりであるが、私自身は、あまり接する機会を持ち得なかった。よく個室に入っている大マーチャンは、ちょっとしたことでも機嫌になり、怒りをまき散らしている。この狭い病棟の中で、大マーチャンは、その大きな体と、いらだつ心とを、もてあましているようだ。大マーチャンは散歩が好きで、外へ車椅子を押して出てやると機嫌よくニコニコしている。私どもの仲間の担当者も、その不機嫌さにふりまわされながら、よく一緒に散歩に出ていた。その担当者が、かかわっていない時の大マーチャンは退屈そうに見える。ひとりでいると、退屈し、不機嫌になっていくみたいだ。大マーチャンの情緒不安定は、きわめて状況的なものだろう。相手になってもらえないが故の欲求不満の発露であると思われる。

●この4人までが、一応まがりなりにも、言葉で話のできる子どもたちだ。ただそのかかわる相手は、もっぱらおとなに限られている。この4人にとって、他の子たちは、おとの注意を自分からそらすライバルでしかあり得ない。この子たちは、毎日実に退屈そうで、少しの新しい事態をも見逃さず、楽しもうとする。しかし病棟の限られた生活の中で、退屈は、積み重なるばかりなのだろう。誰か相手になってくれるおとなを求めて働きかけるか、あるいは、相手にされないことを憤っているようだ。

3. “ひと”への不安

〈タケシ〉：3日目の夕食介助は、タケシが私の相手だった。タケシは、1日中、床に寝転がったままのおとなしい子だ。“理解力はありますよ”と看護婦さんは、言うのだが、私にはピンとこない。ふだん、声をかけても、さわってみても、表情も変えずに、いつしか私のそばから転がって離れていってしまう。タケシは、私との接触を避けていたようだ。“人見知りをしますから”との看護婦さんの言葉にふと思いついたところがあった。この時の食事場面も、タケシにとっては、不安、緊張のかなり高い状況であったようだ。手足・顔・舌が、不随意的に動きまわり、スプーンを持つ私の手は、はねとばされ、口の中に入れた食物も押し出されてくる。かたわらの看護婦さんが、タケシに話しかけ、その意志を私に通訳してくれる。私はなるほどと思いあたり、私にとって今まで無意味であったタケシの動作が、ひとつづつ意味をもってくる。私は、このタケシの自己表現を見つかられていた。

〈パットくん〉：タケシに対する私の認識を改めさせられた直後、私はパットくんの食事介助もやってみようと思いついた。パットくんも、タケシと同じように、

全身を使って自分の意思を伝えようとしてきた。“イヤダ”というために、体をふせ、顔をしかめ、何度も何度も体をねじって顔をそむけてみせる。その意志が、私に伝わらないでいる時も、根気よくその意志表示を繰り返す。その子の伝えようとしていることがわからないでいる私の方が、自分のにぶさかげんに哀しくなってしまう。

〈カンちゃん〉：一日寝たままのカンちゃんも、その気になって見ていると、かなりの理解力を示す。名前を呼ばれると一生懸命口を開け、手を挙げようとする。フトした折に、私が話しかけると、おびえたように顔をそむけてしまった。カンちゃんは、この病棟の中で、すごく心細い思いをして、一日動けずにいるのだろう。慣れた看護婦さんが、そばに居る時の安心した表情は、また格別だ。そんな時でも、新しい事態を回避することには、一生懸命である。

●この3人は、理解言語があるても、全身に及ぶ麻痺のため、自分の意志表示が思うに任せないでいる。まわりの状況は、充分に理解できるだけの理解力と感受性をもちながら、一方、それに自らが働きかけて、操作するだけの機能が伴わない。こうした事態の中で、この子たちは、すごく無力であり、孤独であることを感じずには居られないのだろう。新しい事態は、まさに自分ではどうにもならない不安な事態であるのだろう。先の4人は、まがりなりにも、動けるだけに、退屈そうにしているが、この子たちは、退屈するだけの余裕もないのかも知れない。しかし、私どもの集団保育の時に、一番嬉しそうに反応したのは、この3人だった。その反応は、実に的確で、その全身に自然な表情があった。

4 不思議な笑い

〈タツオ〉：昨年にもこの実習の対象児となったタツオは、その担当者からも、正体不明と述べられた。名前を呼ばれると時に返事をし、話しかけられればうなずいているが、一日中、笑っているような表情を崩しましないで、深い冥想にふけっているように見える。

〈シュウちゃん〉：自分の身辺のことは、そのたくましい腕で大体やってのけている。シュウちゃんもまた、ニコニコとその笑みを絶やすことがない。自分の場から四方を見まわしている。“シュウちゃん、オハヨウ”と声をかけると、照れ臭そうに笑って下を向く純情少年なのだ。

●タツオもシュウちゃんも、言語理解はあるようだ。しかし、その割には、私にとって正体不明だ。いつもニコニコしているが、その笑いはつかみどころがない。この穏やかさは何なのか。その背景に流れる

感情は、私にとって理解を超える。私の話しかけを2人は、スルリと受け流してしまっている。まわりの流れの中に、淡々として身を任せ、無為の平安の中に埋もれてしまっているようだ。

5. ミザル・キカザル・イワザル

〈ヤッチ〉：ヤッチには、どことなく関係のつき難いところがある。最初のうちは視線も合わない。話しかけても反応しない。今回の対象児のひとりでもあったが、担当者との関係がついてくると、共生的とも言えるベタベタの甘えを示すようになっていった。ただヤッチは、特定の相手には、ベッタリ甘えはするが、その関係のもち方は限定されている。ヤッチの心の底はわかりにくい。相手になってくれる相手を慎重に選び、その枠の中で、のめり込んでいっているようだ。担当者が、集中的にかかわってくれているのが、嬉しくてたまらないように、ニコニコし、ベッタリと甘えている。指示の理解もできるようになったが、それ以上には深まり得ない。ヤッチはもっと深いところで、心を開ざしているようだ。

〈ヒサコ〉：童謡を聴いてさえいれば、ヒサコはことのほか御機嫌だ。専用のテープレコーダーで1日中、童謡を聴き、専用の椅子で体を揺すって笑っている。音楽が途切れると、なればぱニック状態になる。音楽をききながら、体を揺しているヒサコに近付いてみると、ヒサコは私の髪の毛をふいにつかんで引っぱり寄せる。手足をとって、揺すってやるとニコリと笑う。けどそれ以上には通じ合えない。ヒサコが、ガツンガツンと椅子の背に頭を打ちつけるのを、私はハラハラしてながめていることしかできない。その時、ヒサコの瞳は空に漂っている。

〈ユリ〉：ユリは、部屋のすみにひっくりかえり、ひとり黙って大きな口をあけ、悲しそうに涙を流している時がある。“ドウシタノ”と私は語りかけ、肩に手をやる。ユリは体をねじって顔をそむけて泣き続ける。職員が働きかけても、顔をそむけ、ひとり大きな口をあいて涙を流しつづける。きけば、周期的にこういう時期があるのだという。私が次に会った時には、テーブルを叩いて笑っていた。私は、ユリの顔を両手ではさみ、額をよせる。ユリは、さりげなく視線をそらす。楽しげにひとりで椅子を前後にゆすって笑っている。そして自分の世界にひたっている。私は、ユリと一緒に床に寝転がってたわむれたり、食事の介助をしながら、ユリとの接点をさがす。ユリの手をとり、顔にさわり、ボールを頬にくっつけてやると、ユリはアハアハと楽しげに笑う。しばらくすると、ユリは何気なく私の身体にもたれかかってくる。そうして、すぐにまたころがって離れていく。

“こうやって、パーンッとやってやると喜ぶんですよ”と、ユリの手をとって、テーブルを叩き、ユリの笑顔を喜ぶ保母さんたちの明るさが、今のユリを何とか現実につなぎとめているように思われる。その細い糸のあることをユリの涙は示しているのだと思う。

〈シロウ〉：シロウは、緊急ケースとして入園してきたばかりだ。ひとり、意識的に集団から離れ、耳と目を両腕でおおいかくして、口をつぐみ、ミザル・イワザル・キカザルをきめこんでいる。それでも、指のすき間から、チラリチラリとあたりをうかがい、他人が近くに居ると、ただそれだけで不安におちいり、混乱し、ひっくり返って、バタバタと足を器用に交錯させる。シロウもまた今年の対象児のひとりであったが、シロウの担当者は、このとりつくしまのないシロウに困惑の体であった。シロウにとって、新しい対人接触は、不安と恐怖に満ちたものであるらしい。ゆっくり時間をかけて、しかも能動的に、この心をほぐしていくことが、考えられるべきだと思う。5日間のうちに、シロウは、いつもそばに居て働きかけるともなく働きかけてきた担当者に心をゆるしはじめ、そのマッサージに身をまかせるようになってきている。

●この子たちの対人接触の稀薄さは、基本的に自閉的傾向を示すものと考えて良いだろう。対人関係は、表層的であり、拒否的・回避的であったりする。ヤッチには、まだ通じあえるところが残されているが関係のもち方は、一方的であり、接点は少ない。この子たちにとって、集団の存在が、その発達にとって意味あるものとなるためには、充分な安定感の持てる関係が、基盤となることが必要とされるだろう。この子たちは、関係の拡張の基礎となるべき、母性的なものとの強いきずなが必要であると考えられる。そうでなければ、多くの他人の中に投げ出されたこの子たちには、自らの自己刺激回路の中に、没入するしかないだろう。この状態から脱して、この子たちが発達していくのは、きわめて困難な課題である。それだけに強力な援助が、この子たちには欲しいと思う。

6. 無為の世界に

〈サチコ〉：胎児性風疹症候群であるサチコは、全盲で、全聾で、多くの時間、ひとり黙然と座って何かを待っているようだ。表情はいつもニコヤカで、その身体に触れていてやると、満面に笑みが浮かぶ。手足をとって動かしてやると、サチコはのどを鳴らして笑う。手を離すと、じっと神経をとぎすまして待つ。ちょっと触れただけで、サチコはさっと私の手をつかむ。足をくすぐっ

てやると、いぶかしげな戸惑ったような顔をして体をくめる。そしてじっと待つ表情になる。私の笑顔も、話しかけも、サチコには通じない。ただサチコをなでる手があり、叩く手があり、つっつく手がある。その手のむこうにサチコは何を感じ、どんな思いを投げかけているのだろうか。離れるとまた、ひたすらに神経をとぎすまして待つ表情になる。手をとって立たせるとニコリと笑って、細い足で一步一步、あるきはじめる。このサチコが、これだけ穏やかで、これだけ感受性豊かで、表情に富むことは、私にとっては一種の驚きである。サチコは一昨年と較べても、たしかに成長したと感じられる。

〈小マーチャン〉：この子もやはり目が見えない。表情もほとんど動かさないままに、目をとじ、耳をふさいで、いつも静かに体をゆっている。小マーチャンは、そうやって何を見、何を聞いているのだろう。自分ひとりの世界の中で、その表情は、静かで穏やかである。

〈アキコ〉：大仏さまみたいに座ったまま、一日中でもニコニコしている。私が近くに居ると、手をのばしてきたり、近寄ってきたりするのだが、そばに居る限り、ただニコニコと座っているだけだ。

〈アヤちゃん〉：アヤちゃんも、ねっころがったままニヤニヤと笑いを絶やさない。手足を動かしては、よくひとりで遊んでいる。

〈イチタ〉：この子もやっぱりニコニコと座って、ほんやりあたりを見回わしている。イチタの頭には、大きな脳手術の跡がある。この子の瞳は、いつも虚ろで、口はポカンとあけられている。

〈中マーチャン〉：やっぱり頭に大きな手術の跡があり、一瞬私をドキリとさせる。彼女はいつも、寝ているのだろうか、醒めているのだろうか。前かがみに、ぐったりと座り込んで、目をつぶり、じっとして毎日をすごしている。時々、とんだりはねたり、突然はじめて、ピタリと止めている。エネルギーを放散して調節しているみたいだ。

〈シンコさん〉：よく四つんばいになったまま動かず居ることがある。ちょっとやそとの働きかけでは、微動だにしない。

〈コンちゃん〉：この子の動いているところを、私は見たことがない。座って下をむいて一日よだれを流している。

●この子たちの多くについては、私はまだ眺めていることしかできないでいたと思う。サチコと小マーチャンを除いては、みな年令の高いおとなたちだ。みな座ったまま、あるいは寝転がったままに、あるものは、ニコニコと、あるものはボンヤリと、一日を過ごす。サチコや小マーチャンには、まだ何かを待

つ様子がある。生きているなと実感できる。かかわってみれば、それなりに何かが通じる。あとのおとなたちの反応は、あまりにも虚ろである。その中味が、何ともカラッポのように感じられて仕方がなかった。しかし、時折示す、唐突な動きは、この子たちが、何かを感じ、何かを思い、それを表出したことを示す動きだろう。その内的世界は、いかにも未分化で、混沌としているように思われる。

7. まどろみの中で

〈ヒデキ〉：ヒデキは、ほとんど一日中、眠っているだけみたいだ。一昨年と少しも変わらない姿で、暗い顔して眠っている。私がその身体にふれたりすると、パイとそっぽをむいてひねくれる。私が執拗に、その額にさわりつづけると、ヒデキも執拗に、顔をそむけ続ける。表情は、深い人間不信をたたえているのか、ひたすらに暗い。ヒデキは、働きかけられるのが、わずらわしいのだろうか。体を起こされると、時を移さず、バシンバシンと、猛烈な勢いで、自分の横面をひっぱたきはじめる。ヒデキの瞳は、強烈な自己否定の色だ。未分化な、ものすごい憎しみの中に、ヒデキは生きているようだ。

〈エイちゃん〉：小さなエイちゃんは、緊急ケースとして、入ったばかりだ。やはり一日中ねたきりで、モーローとした世界の中を、モーローとして生きているようである。ほとんど何物にも関心をよせないようでありながらただ、エイちゃんは、抱き上げられると、実に不安そうに、悲しそうに泣きはじめるのだ。

〈カズコ〉：ねているのか、起きているのか、いつ見ても判らないカズコは、食事のさいちゅうでも、いつの間にかねむってしまう。チラチラと目の前で動くものがあるとそれを見て笑う。いかにも赤ちゃんの3ヶ月微笑みたいだ。食べてるものも離乳食だ。一日の生活パターンは、赤ちゃん同様。刺激に対する反応の仕方も赤ちゃん水準だ。なかなか発達しない赤ちゃんだ。

〈トモコ〉〈アサミ〉：トモコもアサミも、私の中では、きわめて印象に薄い。着替えをさせた時の、細くて曲ったその手足を、のばして動かしてやった時の、嬉しそうな笑いだけが残っている。この子も赤ちゃんだなと思ったものだった。

〈ノムくん〉：ノムくんは、本当に一日中眠っているだけだ。上向いて眠ったまま、全然体を動かす気配もない。時折、ゼーゼーと喉がつまたような音をたてて呼吸をしている。多勢の人間がいるディルームの中で、ひとり人知れず、全身を硬直させて、けいれん発作を起こしていたこともあった。この子は、生きているのだろうかと時折心配になり、脈をとってみたくなるような、そ

んな存在だ。

●ねたっかりで、一日まどろんでいるこの子たちの世界は、私にとって想像を超えるあいまいで未分化な世界だ。遠い昔に多分、誰もが体験した世界なのだろうが、その時の私には、おそらく柔かで、安心できる母の胸があったはずだ。ヒデキには、信じられるものがない。エイちゃんには、安心できるものがない。そんはふたりは、まさに、自己存在についての不信、不安の中に生きているみたいだ。ほかの4人も、ここでの条件は同じはずなのだが、穏やかである。その子たちは、不安を感じるところまで発達していないのか。あるいは、それまで体験してきたものが違うのか。ともあれ、この子たちは、発達していくのだろうか、どうすれば発達が援助できるのか、私には答えるだけの勇気がない。

III この子たちの生きる場

31人の子どもたちを、いくつかのグループに分けて、ながめてきた。これは、私なりに捉え得た範囲内で、対人関係の発達水準の高い者から順に述べてきたものである。

子どもたちは、常に私に、さまざまことを教えてくれている。今年、この子たちは、ひとりびとりがその個性的な生き方を私に示してくれた。ある者は、その小さな一步一步に、歯をくいしばりながらも前向きに生きている。ある者は、現実の世界に生きようとはしなくなっている。またあるいは、すべてをまわりの流れに任せたり、不安に身をふるわせながら生きていたりする。

この子たちは、一体、一日何をしてすごせばいいのだろうか、その不自由な体で。みな、好むと好まざるととにかくらず、ほとんどすべての状況で受身的である。食事も着替えも、入浴も。ある意味では排泄さえも。さらには、人との接触も。すべての子どもたちは、何らかの形で、情緒的な問題をもっている。そのほとんどすべてが、過保護によるものではなく、対人接觸の少なさからのものであるよう理解できる。そうでなくとも、ここではみなが、人とのかかわりを切望しているようだ。発達段階の低い子たちは、母性的接觸の欠如が深刻だ。発達の高い子たちは、かかわりを深める相手のいない退屈さが大きな問題だ。

入ってきたばかりのシロウやエイちゃんの示す不安状態は、気にかかるところだ。これからどうなっていくのだろうか。他者の注意を惹くために、自傷、他害にはしるだろうか。外界の刺激を閉ざして自らの世界に逃げ込むだろうか。あるいは自発性を放棄して、まわりの流れ

に身をまかせるに至るだろうか。できうれば、この状況を乗り越えて、新しい世界へ踏み出していって欲しいと思う。

今、この子たちの生きる場は、ここしかない。乳児院から来たエイちゃん。介護の母親が倒れてしまったシロウ。ここよりほかに生きる場がない子たちだ。ほかの子どもたちもみな、家の中では背負い切れずに入園しているのだろう。けど、職員がここでいかに努めても、この子たちの父親や母親のかわりはできない。人生の大部分を、このひとりのために費すこととは、とうていえない。その父親と一緒に暮していけるヒトシは、まだ幸せなのだろうか。

この子たちは、みな、ひとりで背負っていくには重すぎる苦しみを背負っている。それ故に人生は充実するかも知れない。それ故に挫折するかも知れない。くじけずに一步を踏み出す努力は大変なものだ。私どもには、その援助の道をもっともっと考えることが必要に思われる。子どもたちが、一步を踏み出すことができるなら、たとえどのような一步であろうとも、それは限りなく尊い。それはまさしくその子の人生そのものなのだから。

おわりに

子どもたちは、他のものをかえり見ることなく、ただ自分だけのために生きててくれる相手を求めているのだろう、本当は。しかし、そんなことは望むべくもない。ただ、子どもたちの感じているであろう哀しさとか、感じないようにしてその気持ちとかを、理解し、ともぶれしてくれるような大人が、何人かでも居れば、それは子どもたちにとっても救いとなるだろう。

どんなにしても、理想的な環境を作ることはできないものだ。本当に子どもたちを理解することも、また、私どもにはできないことだ。私の理解は、終極的には、私の立場からのものでしかない。一面的でもあるだろう。及ばぬところも多いだろう。ただし少しでも、この子たちへの理解を拡げ、深める上で役立つことを願ってまとめた小論である。この一步をまた、私自身、大切にしていきたいと思う。

文 献

村上英治 1975 重度心身障害児への人間学的接近（第6報）——ことばある子と——名大教育学部紀要—教育心理学科—22 25-38

西村章次 1973 障害の重い子どもたち 障害児問題叢書 ミネルヴァ書房

A HUMANISTIC APPROACH TO THE SEVERELY PHYSICALLY AND MENTALLY HANDICAPPED
(the 7th report)

— So many handicapped, so many ways of life —

Shuji GOTO

This report is in the same orientation of the series of our previous humanistic approaches to the severely physically and mentally handicapped. In this report I discussed about different sorts of mode of their lives as human beings, living in the North Ward in Kobato-Gakuen. It aims at the extension of our understanding to the handicapped.

I tried to categorize the 31 handicapped into 7 groups on the basis of their manners of human relationships, and to discuss about their lives for each group. Through these discussions I presented how to understand the handicapped in order to have internal relation with them. Some of them are living earnestly day by day, some of them have withdrawn into themselves, and others live their idle lives with indifference toward the world.

They hope that someone warmly understand their pains, or they want to act like a baby, or they feel much anxiety and insecurity. About some of them, I cannot understand their inner world which are so chaotic. But I think, all of them aspire to have the intensive human relations in common.